

爲之儲貳、以悅三條帝之意、及一旦升遐、陵土未乾、又奪其位、以立其外孫、○後天子拱默、以受其制、  
陵替至是、可勝歎哉、

〔榮花物語八初花〕との○藤原わかみや○後いだけたてまつらせ給て、御前○一にゐてたてまつらせ給、御こゑいとわかし、辨の宰相の君御はかしとりて参り給、もやのなかの戸のにしに、どのうへのおはしますかたにぞ若宮はおはしますさせ給、うへの見たてまつらせ給、御心ち、おもひやりきこえさすべし、是につけても一の御子○敦のむまれ給へりしをり、どみにもみずきかざりしはや、猶すぢなし、かゝるすぢにはたゞたのもしうおもふ人のあらむこそ、かひなくしうあるべかめれ、いみじき國王の御位なりとも、うしろみもてはやす人なからんは、わりなかるべきわざかなどおぼさるゝよりも、ゆくすゑまでの御ありさまものおぼしつけられて、まづ人ぞれずあはれに覺しめされけり、

〔愚管抄二土御門〕此君は、○中御母方、○承明門うちたえあらはなる法師○能の孫位に、○即かせ給ふ事はなしとぞ世に沙汰しける、

〔増鏡七内野の雪〕院○後のわか宮十三にならせたまふは、きんむねの中將といひし人のむすめの御はらなり、圓満院の法親王の御でしにならせたまふべしとて、正月○寶治廿八日にその御よういあり、承明院よりわたり給ふ、院のあひろびさしの御車にて、かんだちめは車、ともぎねの大納言を上まゆにて六人、殿上人十六人馬にて色々いよいよそほしうめでたくておはしましぬ、その夜やがて御ぐしおろして、御法名圓助ときこゆ、いどうつくしげさ、佛などの心ちしてあはれに見えたまふ、院の宮たちの御中には、御このかみにてものし給へど、御げさくのよわきは、いまもむかしもかゝるこそいとほしきわざなりけれ、

〔日本書紀六垂仁〕四年九月戊申、皇后○穗母兄狹穗彦王謀反、欲危社稷、因伺皇后之燕居、而語之曰、汝

驕傲